空間・社会・地理思想 24 号，37-49 頁，2021 年
Space, Society and Geographical Thought

学生の地理学

学生と高等教育の多様な地理の探究

マーク・ホールトン *、マーク・ライリー **
（栗林　梓 *** 訳）

Holton, M. and Riley, M. 2013
Student Geographies: Exploring the Diverse Geographies of Students and Higher Education.
***Geography Compass 7:* 61-74. Copyright©2013 by the Authors**
Geography Compass©2013 Blackwell Publishing Ltd

訳者による凡例

・[] () は原著者の括弧、〔〕内の記述は訳者の補足である。
・本文中の引用符（‘’）と二重引用符（“”）は「」もしくは『』で置き換えている。
・本文がイタリックの箇所は、訳文でもイタリックとした。

翻訳権は 2020 年 8 月 24 日に Copyright Clearance Center を通じて取得した。

要旨：
近年、「学生の地理学」と呼ばれるものに関連する文献が増加している。本稿では、学生の移動や（イン）モビリティ、アイデンティティなど、高等教育を受ける学生の地理に関連する研究を総合的に分析することで、2 つの目的を達成することを目指す。第一に、社会科学全般からの重要な議論を取り入れることで、地理学の伝統的な境界を乗り越える。第二に、〔学生という〕複雑で多様な社会集団である者のモビリティと集中についてより明確に理解するために、内向き／外向きの二元論を乗り越える。本稿は、学生の国内移動や国際移動に注目するものから、学生の高等教育機関での経験と大学の立地に関するよりローカルな地理に注目するものまで、この分野におけるさまざまな研究を探る。

はじめに

本誌〔*Geography Compass*〕に掲載された最近の論文は、新しく登場している教育の地理学に関する議論に貢献してきた（Collins and Coleman 2008; Russo and Tatjer 2007参照）。この増加している研究の中でも、高等教育、特に高等教育を受ける学生の地理は、急成長を遂げている分野の一つであり、様々な分野の研究が、多様な地理的な文脈において変化をもたらす行為主体である学生の集団としての重要性を強調している（Smith 2009; Smith and Holt 2007）。高等教育は重要な国際産業であり、イギリスの文脈は世界の他の地域における軌跡を反映している（例えば、Fincher and Shaw 2011; Garmendia et al. 2012）。それらの地域では、学生の地理が、変化する政治的景観と織り混ざっていることが見てとれる。1990年代初頭におけるイギリスでの高等教育の再編では、高等教育機関の数が増加し、知識経済への移行を支えることのできる労働力の育成を根拠として、〔義務教育を修了した〕卒業生の高等教育機関への進学率を50％にまで引き上げるためのインセンティブが導入された（Munro et al. 2009）[1)]。ここ数年は、2010年のブラウン報告[訳注1]を頂点として、高等教育機関のネオリベラル化の進展に伴い、高等教育の性質について見直されてきた。高等教育に関する財源の削減や、国内で学ぶイギリスの学生の学費の値上げの提案は、高等教育にかかる費用の上昇を公的資金でまかなうべきなのか否かを問うことで正当化されており（Marcucci and Johnstone 2007）、高等教育が（卒業生の生涯における収入の増加を通じた）民間財であることや高等教育のシステムにおける更なる競争を促す必要性にも言及している（Brooks and Waters 2011b; Brown 2011a, b; Lunt 2008）。

2010年の終わりから2011年初頭にイギリスの学生によるデモが起こった時に、学生が「裏切られた」「借金を負わされた」と感じていることを大衆紙が報じたことで、このようなイデオロギー的な議論は世間の注目を集めた（Dearden 2010; Tighe and Thompson 2010）[2)]。学術的に、このデモは、高等教育の再編に関する政治経済について考察を行う際に学生の地理そのものについて無視すべきではないことを私たちに間違いなく思い出させる。そしてそれは、Holloway et al.（2010, p. 592）が主張しているように重要な領域ではあるが、高等教育の議論におい

＊　ポーツマス大学地理学部（現在はプリマス大学）
＊＊　リバプール大学地理計画学部
＊＊＊　東京大学大学院総合文化研究科・院生

て、一般的に当たり前かつ前提のこととして表現され、「特定の文化的な文脈において生じる複雑な社会的関係」を無視しているということがしばしば隠されてきた。これらは、本稿が関心を寄せている「学生の地理学」（Smith 2009以後）と呼ばれるものが考慮していることの一つである。比較的最近ではあるが、振り返るに値する学生に関する研究は増加してきており、実際、振り返る必要に差し迫られた研究の軌跡が残されている。こうした研究の中で重要なのは、結果として〔高等教育への〕参入目標の拡大と「新しいタイプの学生」と呼ばれる学生の出現をもたらした1990年代の高等教育の再編[訳注2]である（Leathwood and O'Connell 2003）。より多様な社会背景を持つ学生数の増加は、アイデンティティや経験、モビリティ、公平な高等教育へのアクセスといったテーマとの関係において、学生の地理学の状況を複雑にしてきた。実際、現在進行中の積極的な一連の政策は、特に雇用可能性や長期債務といったテーマと関連して、これらの高等教育を受ける学生の地理を再編する可能性がある。こうした政策改革と公平なアクセスといった概念は、高等教育機関による学生の募集にもおよんでおり、学生が選択し通学することができる大学を決める際の政府の政策や学生の行為主体性が果たす役割に多くの注目が集まっている（Brown 2011a, b; Hinton 2011; Mangan et al. 2010）。Frølich and Stensaker（2010）やMangan et al.（2010）は、それぞれノルウェーとイギリスにおけるこうしたプロセスの複雑性を強調しており、多くの高等教育機関が学生のポテンシャルを最大化するために学生の募集において彼らの多様性により焦点を当てるのに対し、エリートの高等教育機関が本質的に何を学生に提供できるのかを彼らに「思い出させる」ことを指摘している。

Thiem（2009）やHolloway et al.（2010）のような著者らは、これまでに構築されてきた内向き/外向きの二元論[訳注3]を教育の地理学の研究が乗り越える必要性を求めており（Bradford 1990参照）、ここでは、予め2つの論文の主張についてみる。第一に、分野の境界を乗り越えていく必要性である。学生とその地理に関する研究は、本稿で示すように、教育研究の広範な「空間論的転回」の一部とみなすことができるかもしれない（Gulson 2007）。実際に、本稿で後述するように、地理学者が他の分野から出てきた研究から得られる重要な教訓がある。第二に、本稿が他の分野に目を向ける一方で、地理学*内部*から得られる関連した研究を無視してはならないというHolloway et al.（2010）の主張にも留意している。特に、将来の研究の道筋を示す本稿では、社会地理学や文化地理学の領域における概念的な発展が、どのように学生の地理学の理解を深める上で役に立ちうるのかについて探っている。最後に、本稿では、学生や高等教育機関がこれらの複雑なプロセスの中で受動的な傍観者なのではなく、極めて重要なアクターであることを強調することに努める。より学生中心の視点は、誰が大学に行くのかという問題だけでなく、彼らがどこでどのような経験をするのかという問題を再定義するのに間違いなく役立つであろう。本稿は、国際的な研究から概念的な見識を描き出す一方で、特に、イギリスの高等教育の文脈に最も直接的に関連する英語圏の研究について焦点を当てている。これらの研究を総合的に扱うために、本稿の最初の章は、学生の[イン]モビリティが考慮されてきた様々な空間スケールによって構成されている。その後、潜在的に実りのある将来の研究課題について概説する前に、本稿ではこの分野に残る共通した二元論について取り組むことにより、学生の地理学の分野における多様性を認識することに努める。

学生の [イン] モビリティ

国内移動

1995年から2009年にイギリスの〔高等教育機関に在籍する〕学生数が160万人から240万人に急増し（Higher Education Statistics Agency（HESA）2011a）、同時期にアメリカの〔高等教育機関に在籍する〕学生数が1430万人から2040万人に急増したことによって（National Centre for Education Statistics（NCES）2011）、地理学の研究は、学生数の増加がもたらす大学の立地する都市への影響や学生の移動に関心を寄せるようになった。これまで、学生の国内移動を考察した研究にはイギリスに焦点を当てたものが多く、国勢調査（Duke-Williams 2009）やUCAS（the Universities and Colleges Admissions Service）の入学データ（Holdsworth 2009b）を利用することによって、広範なモビリティのパターンを解明してきた。地域的には、これらの研究は、学生の流入と流出は不均等であり、ロンドンやサウスイーストという「エスカレータ地域」（Fielding 1992参照）が純流入側の地域であるのに対し、他の地域は近隣地域や南部もしくはロンドンにある高等教育機関への純流出側の地域である（Higher Education Statistics Agency（HESA）2011b）ことを示している[訳注4]。

現在、実家から離れて勉強するという一般的なパターンが変化しているのか否かという議論が浮上しているが（Christie 2007; Hinton 2011; Holdsworth 2006, 2009a, b参照）、より広範な時間の範囲をとる研究は、勉強と居住の相互関係と関連している、時とともに変化しゆくイデオロギーの変遷を追う上で有益である。学生の住宅は「住むための場所」という当初の形態から、地理的な場所の範囲を超えて、「学生の経験」を確立することができる場所へと変化してきた（Morgan and McDowell 1979; Silver 2004）。19世紀における市民大学のモデルの出現はこうした変化の先駆けの一つとなった。これらの都市的な機関は、より独立したオックスフォード大学やケンブリッジ大学のモデルの代替として運営することにより、地元の人口に教育をもたらし、学生に「地元の」大学に入学する機会を学生に与えるように努めてきた（Holdsworth 2009b）。

イギリスでは、1992年の継続・高等教育法によってかつてのポリテクニクやカレッジに大学の地位が与えられた「1992年以後」の大学の出現が、更なる変化を意味しており、イギリスの研究によれば最大46％の学生が、民間賃貸の集合住宅（HMOs）に居住していることが示されている（Hubbard 2009）。このベッドスペースの需要が高まったことは、1990年代後半における不動産ブームと、2000年代半ばまでの前例のないほどのバイ・トゥ・レット（BTL）市場の急成長と関係している［BTL市場の取引量は、1990年に44,000件であったが2006年には330,000件にまで増加した。総住宅ローンは1999年に3.5％であったが、2006年には28.5％にまで増加した（Sprigings 2008）］。急速に増加する学生数と隆盛するBTL市場の同時性を探ることにおいて、「ステューデンティフケーション」（Smith 2002、2005）という用語[訳注5]は、大学のキャンパス周辺に現れる学生の集中傾向、つまり「学生のゲットー」や「〔学生の〕エンクレブ」（Rugg et al. 2002）を要約するために造られた。学生はキャンパス内に限定されず、変化する多くの都市において重要な役割を果たしていると認識されるようになった。そしてSmith（2009, p. 1795）が問いかけているように、

> 学生人口の増加は、人口の変化やモビリティそして社会的なセグリゲーションといった、広範に渡る社会的な傾向をどの程度媒介しているのであろうか？

これに関連した研究は、学生、そして*その集団*が、いかにして「学生の土地」と呼ばれるものを形成する重要かつ実に強力な消費者集団を作り上げているのかについて明らかにしてきた[訳注6]。中には、ステューデンティフィケーションを近隣地区の衰退や人口の不均衡と同様なものとして指摘し始めた研究もあり、学生や高等教育機関、地方自治体、賃貸住宅の斡旋業者、家主らが、このプロセスとどのように関係しているかについて検討されている（Allinson 2006; Hubbard 2008; Smith 2005; Smith and Holt 2007）。Garmendia et al.（2012）はスペインのコンパクトシティであるシウダー・レアルの異なる現象について報告している。そこでは学生が民間市場の高層住宅に集中し、それによって長く住んでいた住民を立ち退かせている。彼らはこのプロセスを「垂直的ステューデンティフィケーション」と呼んでおり、従来の一般的で水平的な（もしくは街路レベルの）ステューデンティフィケーションよりも目立ちにくいものの、両者のステューデンティフィケーションにおける学生と非学生居住者のコンフリクトがどれほど類似しているのかについて言及している。

最近の研究では、学生に特化したハイテクな賃貸住宅（PBSA）がますます普及することで、これらのパターンに更なる変化をもたらす可能性が示唆されている（Chatterton 2010; Hubbard 2009）。特にこのような開発は、学生を学生自治会のようなより伝統的な学生生活の場から、よりニッチで排他的なPBSA構内の施設へと引きつける役割を果たしている。Kenna（2011）は、アイルランドのコーク市の文脈において、政府のインセンティブや減税の導入が、こうした現象をどのように促進しているのかを観察している。ロンドン（スピタルフィールズ、キングス・クロス、ノッティング・ヒル）とバルセロナ（22@）におけるNido（Nido 2008）による開発はこの傾向における比類ない例である。これらの建物は排他的な都市環境に位置しているので、学生のための「ゲーテッドコミュニティ」として機能し、それによって学生生活の外部性を提供している。これにはプリペイド式のカードによって提供される「キャッシュレス環境」やゲームスペース、ムービーナイト、フィットネスセンターも含まれている。もちろん、こうしたコンセプトのタイプの生活は、すべての学生が利用可能なわけではないが（Nidoの家賃は一週間あたり240ポンドから350ポンド（Nido, 2008））、大学における伝統的な学生の共同住宅と競合するオルタナティブな生活形態が現れ始めていることを示している。ここで示唆されていることは、おそらく固定観念や現金の制約に準拠せず、むしろハイエンド（高

級）で、受動的で、モジュール式の生活をするような新しいタイプの学生の出現と、少なくともこれらを再概念化する必要性であろう。

国際移動

現在、高等教育機関が、ますます国際化していることがよく知られており（Waters and Brooks 2011参照）、この分野において、イギリスへの学生の流入は広く知られた研究の焦点となっている。テリーザ・メイ内務大臣は、「留学生が支払う学費や広範な支出が経済に貢献しているだけでなく、彼らがイギリスにいる間に、築き、維持する個人レベルでの貢献も、決して過小評価されてはならない」と指摘した（Home Office, 2010, p.3）。学生の国際移動に関する多くの研究は、まさにこの点に焦点を当てている。特に、カナダ（Waters 2006）やニュージーランド（Butcher 2004; Collins 2006）、イギリス（Wu and Hammond 2011）などの大学にアジア各国から入学する「東洋から西洋へ」の学生の移動に焦点を当てている（「西洋から東洋」への移動については、マレーシアのステューデンティフィケーションという社会的・都市的な変容を予測した一例といえるSabri and Ludin（2009）も参照）。この研究で、確認された重要なテーマは、海外の学生が西洋の教育をどれほど重要な「文化資本」[訳注7]とみなしているのかである。卓越した英語のスキルや国際的な態度を持っていることを理由として、特に、サービス業から「海外で教育を受けた」卒業生が好まれている（Baláž and Williams 2004; Findlay et al. 2011; Waters 2006）。例えば、南アフリカの学生の場合、彼らの能力が「世界的に認められること」が留学に行く主要な要因とみなされている（Mpinganjira 2009）。Lindberg（2009）は、4つの異なる高等教育システム（イギリス・フィンランド・ドイツ・イタリア）の「学生のモビリティ」（プログラムや制度による学生の移動）と「キャリア初期のモビリティ」を探ることによって、この議論に微妙な差異を加えている。ドイツとフィンランドでは、学位取得段階でのモビリティが高く、キャリア初期、つまり卒業後のモビリティは低いのに対して、イギリスではその逆であるという国の差異が見られる。イタリアでは、どちらのカテゴリーにおいてもモビリティは非常に低く、イタリアの卒業生は、学部卒業後の就職までに時間がかかることが多いという可能性がある。

近年、別の方向への学生の移動、特に、イギリスから海外への留学に研究の注目が集まっている。これはイギリス政府が推進してきた活動であり、イギリスの学生が海外で勉強する時間を取ることの文化的な利点が重要視されている一方で（Department for Education and Skills（DfES）2006）、最近では、学費が上昇する中で、学費が無料もしくは低額であるヨーロッパの国々が、イギリスの学生にとってより魅力的であるという仮の主張がなされている（McVeigh 2011）。Middleton（2011）は、同じような授業料でも、生活費が安く、奨学金が充実しているアメリカに留学することを称揚している。この分野の研究は2つの形態の留学に焦点を当ててきた。第一は、イギリスの学位コースの一部として、より一時的で（通常6ヶ月から12ヶ月ほどの）短期的な留学を行う学生のモビリティに焦点を当てた研究であり（例えばFindlay et al. 2011）、第二は、学部または大学院の学位を取得するために留学を選択する学生の移動に焦点を当てた、より最近の研究である（Brooks and Waters 2009a, 2011a, b）。Brooks and Waters（2009a）は、イギリスの学生が留学する動機や意思決定過程・経験について考察し、大まかに4つの論題を明らかにしている。第一に、留学している学部生は、一般的にはオックスブリッジといった希望していた大学に合格できなかった後に「第二のチャンス」を追い求めて「わき道」に逸れたものとしてみなされることが多かった（also Brooks and Waters 2009b参照）。第二に、これらの〔留学に伴う〕移動において、アメリカやカナダがイギリスの学生の留学先として最も人気がある中で、彼らの留学先の範囲が狭くなる傾向にあるという重要な地理がみられた。第三に、留学と留学前後の旅行の間には強い相関関係が発見された。一方で第四に、海外での教育が最終的に海外での雇用に繋がることが多いのにもかかわらず、インタビューを行った学生にとっての「雇用可能性」は目的としての位置づけが低いということが明らかとなった。しかし、King et al.（2011）による最近の研究では、イングランド2つの地域におけるシックス・フォーム[訳注8]の最終学年1400人のサンプルの中には、留学の経験が仕事に応募したり面接に参加したりする際に「有利になる」という共通認識があったことが指摘されている。このような留学はエリート主義的である可能性がある。Findlay et al.（2011）が主張しているように、国外で学習するイギリスの学生は、独立セクターの教育を受けた者に多く、Brooks and Waters（2011a）も同様に、回答者の多くは、文化的・経済的な資本へのアクセスに恵まれていたことを示唆している（King et al. 2011も参照）[3]。実際に、イギリスからの留学生は、「戦略的な意図」、すなわちキャリアや人生設計という観点で留学を捉えているより

も、「キャリア」の決定を延長する、エキサイティングで、華やかで、楽しい機会として留学を捉えていることが明らかになっている（Waters and Brooks 2010; Waters et al. 2011）。

上述の議論が教育のモビリティに焦点を当てている一方で、学生の国際移動が、よりローカルな高等教育の学生の地理と結びついているのかという議論、特に、留学生が学生化された空間をどのように利用し、経験しているのかについての議論との接点はあまり明確ではない。Fincher and Shaw（2009, 2011）は、住宅の配列と公的/私的空間のレイアウトを提供することを通じてメルボルン（オーストラリア）における（非）計画的な場所づくりについて説明をすることで、このことについてほのめかしている。留学生がどのように空間を演出するのかを示す（通常は、その国の学生人口とは対照的なものである）「制度的」「位置的」「社会的」なプロセスがあると、彼らは結論づけている（Fincher and Shaw 2011）。このような議論を進めるにあたり、Waters and Brooks（2011）が概説しているように、特に高等教育の国際化が進行していることを考慮して、これらの*様々な*プロセスが多様でグローバルなコンテンツの中でどのように絡み合っているのかについて注意を払うことが重要である。

ローカルな学生の地理学：残留、進学、そして適応

「大学への進学」（Holdsworth 2009b）は家を出ることと同義である、という地理的な区別にも疑問が呈されており、「地元に残留する」ために、通学可能な距離にある大学を選択する学生の数が増加しているという研究結果がある（Christie 2007; Holdsworth 2006; Patiniotis and Holdsworth 2005）。ブルデュー（1977, 1986）のハビトゥスと資本の概念は、これらの文脈から学生の経験を理解する充実したフレームワークを提供してきた。ハビトゥスは、ここでは「[...]社会的な条件の生産物である後天的な特徴であり[...]、完全にもしくは部分的に、類似した社会条件の人々に共通しているもの」（Bourdieu 2005, p. 45）であり、グループもしくは個人の行動はハビトゥスの影響を受け、今度はこうした流れが、ハビトゥスの創生と調整に影響を与えるとCrossley（2001）は主張している。したがって具体化されたハビトゥスは、個人のアイデンティティを内包し、特定の環境や社会的な状況に対応するための正統なツールを個人に備え付けるので、学生の高等教育機関への移行やそこでの経験を探るのに適している（Holdsworth 2006）。ハビトゥスは社会的に構築されているため、アクセスは普遍的なものではなく、階層的な意味を持つものである。つまり、「不適な」タイプの文化資本を持っている者は、自らの文化資本の「タイプ」が一般的ではない場違い的な状況に適応することを困難だと感じる可能性がある（Savage et al. 2005）。

概念的なフレームワークとして、ハビトゥスと文化資本は高等教育に関する多くの議論、特に公平なアクセスに関する議論に適用されてきた（Leese 2010; Patiniotis and Holdsworth 2005）。しかし、この議論は、単純に公平な入学という以上の議論である。Patiniotis and Holdsworth（2005）が主張しているように、ハビトゥスは社会階級や家族的な地位に埋め込まれているものであり、それらのことは、高等教育を受けた経験のある者が、高等教育への移行を最大化するために学生が必要な「正統な」タイプの文化資本を伝達していることを意味している。この〔ハビトゥス〕は、プロフィールを向上させ、将来のキャリアの見通しを有利にすることができる学位それ自体から離れて、さらなるプロセスの知識を獲得することにまで及んでいる（Crozier et al. 2008）。逆に、Christie（2007）によって定義された非伝統的な学生は、労働者階級やマイノリティのバックグラウンドを持つ第一世代の大学の学生であり、大学に「適応する」ことに、より大きな困難が伴う可能性がある。このような排除的なプロセスは、しばしば、学生の学業に関する能力を超えて社会的なネットワークにまで侵入し、社会階級やバックグラウンドが暴露されることがある（Clayton et al. 2009）。Crozier et al.（2008）が主張するように、これは〔非伝統的な学生〕を大学生活から社会的にも学術的にも撤退させてしまうことである。こうした不利益の概念とは対照的に、Lehmann（2009）は、それによって実際には、一般的な労働者階級の学生の性質（成熟度、責任、人生経験）が彼らに中産階級の野心を実現させる機会を提供するツールとして機能することにより、労働者階級のハビトゥスが「道徳的優位性」を構築する可能性があると主張している。

「正統な」もしくは「不適な」道のりの間にある高等教育へのアクセスの格差は、Leathwood and O'Connell（2003）が「新しいタイプの学生」と呼んでいる人々を生み出している。この語は、主に、より幅広い学生が大学生活を経験することを可能とした「1992年以降」の大学の登場によって、生まれたものである。この系譜を理解することは、現代の学生の

地理学の研究に使用されている専門用語を理解する上で重要である。より職業や産業のトレーニングを提供することを目的として、1960年代から、ポリテクニクやカレッジといった高等教育が成長し（Pratt 1997）、これらの機関が大学としての地位を獲得したことによって、伝統的な区分が否定されているにも関わらず、トップの研究主導の機関には圧倒的に白人と中産階級の学生で占められており、新しい階層制が出現したとReay et al.（2001）は主張している。Reay et al.（2001）の研究は、「非伝統的な」タイプの（もしくは「新しい」タイプの）学生と「地元の」学生の境界を曖昧にし、「労働者階級の学生のナラティブには、経済的に特権的な学生のナラティブにはないローカリズムで満ちていた」ことを観察している（Reay et al. 2001）。加えて、Christie（2009）は、個人的な数多くの優先事項を通じて、若者の行為主体性は、伝統的な依存性と非依存性の移行経路を崩し、本質的に「学生のアイデンティティ」をハイブリッド化していると主張している。このような、若者を学校ベースの教育から職場へと届ける「移行インフラ」（Higgins & Nairn, 2006）の変容に関する議論の中では、大学教育はこの移行の中に含まれると予期されており、リスクや費用の問題と親への継続的な財政的負担を伴っている。差異がより可視的で制度的なハビトゥスが、最小化されたり克服されたりしうる環境に学生が身を置かれることにより、新しいタイプの大学は、非伝統的な学生に帰属意識と「場所の感覚」を確立する機会を提供することができると主張されている（Read et al. 2003; Reay et al. 2010）。しかし、Archer and Leathwood（2003, 177）の研究で、ある回答者が指摘しているように「彼ら［非伝統的なタイプの学生］は大学を経験するが、大学は彼らを経験することはない。」これは、近接性が、帰属意識を構成するのに必ずしも十分ではないことをほのめかしている。このような研究の重要なメッセージは、大学への経路は高度に個人化されており、個人の経験の現実は彼らが予想した現実とは異なっているということである（Leese 2010参照）。

文化資本は入学希望者に対してどのような教育機関に*入学できる*のかを伝達する役割を果たしているだけでなく、学生が*どこの*教育機関に通うかを地理的に決定しうる。Reay（2003）は、ロンドンの職業教育カレッジの課程に所属している労働者階級の女性を対象とした研究を通じて、そのような学生のモビリティは、彼女らのモビリティの機会を制限する家庭の条件によって制約されていることを示した。したがって、地元の教育機関への近接性や「正統な」文化資本へのアクセスは、意思決定過程に伝達する。しかしながら、本研究における女性の場合、彼女らの地理的な位置（ロンドン）は、彼女らの条件に最も則した高等教育機関の選択を行う機会に恵まれているということを意味している。リバプール（Holdsworth 2006, 2009a）やエジンバラ（Christie 2007）においても同様の研究が行われており、これらの研究は、ある都市の人気な高等教育機関を選択した多様なタイプの学生のモビリティの特徴に関する結論と一致している。しかしながら、多くの非伝統的な学生は「インモビリティ」によって制約を受けていると感じている（Reay 2003）。高等教育で得られる経験は新しい機会を拡大させ、最終的には、彼らの社会的なアイデンティティを変化させる可能性がある一方で、非伝統的な学生は（必ずしも常にではないが）家庭の状況によって地理的な位置に制約を受け、上述のような可能性を最大限に活かすことができないことを意味している。

しかし、ハビトゥスは、ある意味ではそうした大規模で多様な社会集団の複雑性を見逃す可能性のある固定的で階層的なフレームワークであるがために、学生や彼らのモビリティの選択にハビトゥスを適用することは、複雑なことである。Reay（2004, p. 436）がコメントしているように「ハビトゥスは主に社会における支配的なグループの優位性と、従属的なグループの支配を分析するための方法である。」Patiniotis and Holdsworth（2005, p. 84）はブルデューの理論は「自己実現的予言であり、『不適な』タイプの文化資本を持った学生は高等教育機関に入りにくかったり、最大限活用できなかったりして、大学に行っても疎外感を感じる」ことを示していると主張している。これらの引用がほのめかしているように、単純にハビトゥスで説明できないことは、大学を通じて移行を成功させた場合と、その逆である。Holdsworth（2006, p. 499）が主張しているように、移行が直線的なプロセスとなることは滅多にない。したがって、固定的で世代間のものとしてのハビトゥスの静的な表象は「選択、リスク、再帰性」といった概念とは容易には一致しない。特に、イギリスにおいては、1990年代初頭に大学に入学した第一世代の学生の子供である新しい世代の若者が高等教育〔機関〕に入学するようになるので、この議論は不可避的にますます行われていくことであろう。これまでの研究の焦点は、大学に通うことが肯定的な経験であった親から、どのように文化資本が伝達されるのかということであったが、親の大学での経験があまりない場合や、子供が大学に通うことを親が思いと

どまらせる場合についても議論の余地がある。

今後の展望

近年、高等教育を受ける学生の地理に関する議論が進展しているようである一方で、間違いなく未探究の課題も残されている。これらは概念的・方法論的なアプローチと、高等教育における現代的な変化によって開かれる新しい研究領域の双方と関係している。アプローチの観点において、例えば高等教育に関するアクセス、教育達成、地位形成といった議論では、一般的にジオデモグラフィックデータが利用されてきた。このデータを利用した今後の研究においては、中等教育のデータを用いた同様の分析（例えば、Johnston et al.'s（2007）のエスニックの構成と教育達成の結果）において示された、相関関係に因果関係があるとは限らないという注意書きが重要である。ここでは、補完的なアプローチの適用が大いに必要とされており、ボリビアの農村部におけるPunch（2002, 2004）のような留意が必要であろう。異なる教育水準をみているものの、Punchの研究は、数値データの背後に潜んでいるものに対して、よりエスノグラフィックなアプローチをうまく適用していることを示している。また、このケースでは、無数の要因（構造的制約、家事労働の需要、気候条件を含む）が個人の教育経験の形成や公教育システムの問題とどのように結びついているのかに注目している。このような詳細なアプローチは、学生の経験の多様性をより深く考察するのに実り豊かなものとなるかもしれない。ここでレビューしている研究は、高等教育機関から、もしくはその内部で「他者」とされたままのグループがあることを示している一方で、「地元の」「非地元の」もしくは「伝統的な」「非伝統的な」学生というような二元論的な分類傾向が残っている（Christie 2007; Clayton et al. 2009; Holdsworth 2009a）。Holloway et al.（2010, p. 592）は「学生は彼らの気質や態度において多様であり、すべての学生が消費者志向で酒飲みであるという（イギリスの）メディアのステレオタイプにはそぐわないということを注意することが重要である」（Andersson et al. 2012; Hopkins 2011も参照）と主張している。このようなメディアのステレオタイプの起源は不明瞭かもしれないが、そのような文化的なステレオタイプは、高等教育を受ける学生を快楽主義的で無責任であると表現する大衆文化においてしばしば用いられてきたことによって永続してきたようである（Moffat 1991）。したがって、ここでは学生グループ*内*や*その間*での経験の多様性に関する研究、特により流動的で不均質な分類をするために、こうした一枚岩のような二元論を壊すような研究が必要とされている。

現在のイギリスにおける高等教育の再編に合わせて、本稿では地理学における学生のモビリティに関する議論の再評価も必要としている。その他、Holdsworth（2006, 2009b）、Christie（2007）やDuke-Williams（2009）の洞察力に富んだ研究は、学生のモビリティにおける本質の変化に着目してきたが、これらの理論はさらに発展させることができると言えるだろう。この研究の多くは、必ずしも将来の雇用に関連して必要とされるとは限らない学位〔課程を〕受講することのできるより多様な入学者にとって、大学への進学費用がまだ魅力的であった時代に行われたものである。これらの研究から得られる見識は、授業料の上昇、卒業生の仕事の不足、若者が住宅双六を進む年齢の上昇といった、新たな環境が新しい意味を持つ可能性があるということである。特に、多くの若者が生活費を削減したいと考えているため、学生は実家から通うことのできる高等教育機関に通いたいと考えるようになるかもしれない（Holdsworth 2009b参照）という予想は結実する可能性がある。このような傾向がどのように展開されていくかは、暫定的に都市部における「脱ステューデンティフケーション」（Sage et al. 2011）と呼ばれるものに対する興味深い問いを投げかけるであろう。そして「脱ステューデンティフケーション」[訳注9]はHMOsの需要の低下によって悪化する可能性がある。同様に、実家で暮らしている学生と大学に通っている学生とでは消費の習慣が異なるとしている現存の研究の主張は（Chatterton and Hollands 2003）、より伝統的な学生の生活形態の変化が、学生中心の住宅やレジャー施設に対して長期的にどのような影響を与えるのか？「学生向けの都市のサービス部門」に対してどのような影響を与えるのか（Chatterton 2010）？また、学期中の「学生のお金」に依存していきた広範なコミュニティにどのような影響を与えるのか？といった問いに対する地理学的な調査の道筋を切り開く。

こうした高等教育の再編を考慮すると、既存の学生の地理学に関する研究と合わせて、よりミクロなスケールでの研究の必要性があることは明らかである。学生の「生活世界」（Riley 2010）や、特に、学生の経験の重要な部分を成している（余暇や生活空間のような）非制度的な空間に関する研究の必要性が

差し迫っている。「学生のホーム」の地理に焦点を当てた研究は不足しているが、学生の住宅は、特定のアイデンティティ（ジェンダー、セクシュアリティ、政治、宗教）が作られ、時には〔それらのアイデンティティが〕互いに対立するという周縁化の空間を内包しているので、こうした研究は重要な分野である（Andersson et al. 2012; Taulke Johnson 2010）。今後の研究では、学生がどのように居住地選択を行うかだけではなく、この居住地選択が学習の過程でどのように変化するのか、そしてさらに重要なこととして、ホームメイトとの関係が時間の経過とともにどのように変化するのかにも着目していく必要があるだろう。私たちは、学生の地理学に関する研究は、より速射的なアプローチを乗り越え、長期的な変化を考慮する必要があると主張している。学生の生活空間に関するミクロな地理に着目した数少ない研究の一つに、学生の住宅に存在しうる異性愛規範的な言説を探究するとともに、学生の住宅がどのようにゲイ男性を周縁化しているのかを検討することを通じて周縁化について考察したTaulke Johnson（2010）の研究がある。Taulke-Johnsonの研究は、寝室を超えて〔ある学生が〕「ゲイであること」が浸透してしまうと、住宅内の同僚の学生によって（言語的や心理的に、そして属性の破壊を通じて）ゲイの学生が犠牲になるという評価で満ちている。この研究では、これらの家の中における〔ゲイではない〕他の学生が、その中でどのように支配的な言説を主張しているのかについてみている。ここで重要なのは、私的な空間での他人化における力の利用である。異性愛者のホームメイトは、家の中において、同性愛が許容される場所（すなわち、プライベートルーム）とそうではない場所（すなわち、共同のエリア）を空間化してきた。このような形式の中で、（一見均質な）「学生のコミュニティ」に簡単な言及をするような、研究の本質主義的な傾向を乗り越える更なる研究が必要とされている。特に、Taulke Johnson（2010）が示唆する広範なセクシュアリティの地理に関するような、学生のサブカルチャーの広がりに対するより徹底的な分析には重要な潜在性がある。

中には、21世紀の学生がどのように大学での生活を経験するのかに影響する社会的・文化的・経済的な要因を含め、「学生の経験」の本質は直線的ではないことを明らかにしている研究もある（Crozier et al. 2008; Holdsworth 2006, 2009a）。しかしながら、これらの研究の多くは、弾力的な「学生のアイデンティティ」の本質について指摘しているが、現代の高等教育機関において学生「であること」を構成しているものを正確に問う道を切り開き始めているのかもしれない。ちょうどLeathwood and O'Connell（2003）が、世紀の変わり目に「新しい」タイプの学生を生み出す〔高等教育への〕進学機会均等政策の役割について議論したように、通信学習を通じた資格の取得や、継続教育カレッジの課程での学位の取得、または現任訓練制度といった代替的な方法が、学生のアイデンティティの解釈を広げていく可能性がある。これらの学生の多くは、単身もしくは大学入学前の若者の間で、学生ではない環境の中で大学生とは全く異なる経験をする可能性が高い。Dibiase（2000）が主張しているように、そのような学生は質的に異なるグループであり、彼らの高等教育へのアプローチや彼らの基本的な要求、そして将来の欲求は、より伝統的なコーホートとは異なるものであり、今後の研究は、これらの学生をより伝統的な学位取得の道から遠ざけるものや、学習経験がどのように彼らの日常に組み込まれているのかについて解明し始めるかもしれない。最後に、本章では多様性を認識する必要性を指摘したが、（より一般的には、社会地理学に向けてられていることだが）学生の経験の多様性を強調し問い直す必要性と並行して表明されなければならない注意点がある。それは、周縁的な集団に執着したり、それによってより主流で中心的な集団を無視したりしないようにすることである。

「学生を第一に据える」（Holloway et al. 2010以後）ことを目指して、本稿では、「学生の地理学」の研究が、地理学の内部と外部の両方から得られる見識を巧みに利用できるのかを説明することによって、教育の地理学（Thiem 2009; Holloway et al. 2010）における内向き/外向きの2分法を乗り越えようとしてきた。私たちは、重要なのは*地理学*と同じくらい*学生*を強調することだと考えている。既存のデータセットは、移動やその傾向の地図化に、明白に焦点を当ててきたが、学生についての更なる研究が必要である。ステューデンティフィケーションに関連して、研究のレンズは、大学が立地する地域に対して学生のもたらす影響だけでなく、これらの大学立地が学生に対してどのような影響を与えているのかという方向に変化していくかもしれない。「学生人口」の累積的な影響は多様な文脈で考慮されてきたが、すべての学生が同じようにこれらの場所を経験し、消費し、占有するわけではないのは明らかである。むしろここでは、非日常的なことを考慮するだけでなく、大学という制度的な空間から余暇空間や学生の「ホーム」といった日常的な空間をも考察する必要がある。このように学生の地理学は学生の多様性を探

究するべきであろう。そして従来の伝統的/非伝統的な二項対立的な類型化を乗り越えて、学生の声を取り入れる方法論的な発展を続けていくべきである。最後に、イギリスの高等教育機関の内部で起こっている広範な変化が、学生の空間にどのような影響を与えているのかはまだ明らかではない。したがって、国内外における学生のモビリティの多様性が増大することは、学生の地理学の領域が常に変化するという更なる再概念化を予兆しているであろう。

謝辞

Carol Ekinsmyth氏、Liz Twigg氏、匿名査読者、またJon May氏には、本稿について洞察に富んだ建設的なコメントをいただいたことに感謝申し上げます。本稿の誤謬や脱漏はすべて私たち自身の責任です。

略歴

マーク・ホールトン[訳注10]はポーツマス大学地理学科の博士号取得候補者である。彼の博士論文のタイトルは「*学生都市の(再)解釈：学期中の大学所在地において居住地の分散した学生が空間や場所をどのように消費するのかに関する調査*」である。この研究は、居住地の分散した学生がその家の中のミクロな地理や大学のキャンパス、学生のコミュニティをどのように渉っているのかに主な焦点を当てており、部分的には現在進行中の高等教育の再編や学生のモビリティの意思決定に及ぼす潜在的な影響に促されてきた。

マーク・ライリー[訳注11]は、リバプール大学で地理学の講師を務めている。それ以前は、エクセター大学とセントアンドリュース大学の両校でAHRCの資金提供による研究員を務め、ポーツマス大学では地理学の上級講師を務めていた。彼の広範な研究関心は社会地理学と文化地理学に関連している。現在、彼は、家の中での環境に配慮した行動を調査する、リーバーヒューム出資の研究プロジェクトに従事している。彼の研究は、*Environment and Planning A*、*Geoforum*、*Journal of Rural Studies*、*Social and Cultural Geography*、*Applied Geography*、*Journal of Historical Geography*、*Gender, Place and Culture*などの雑誌に掲載されている。

付記

名古屋大学地理学教室および東京大学人文地理学教室では、原著論文・翻訳について議論をする機会を得ました。そして、先生方や院生諸氏から数多くのご意見をいただきました。また、翻訳にあたって、その他にも多くの方々にご意見を頂戴しました。末筆ではございますが、翻訳に関わったすべての皆様に心より感謝申し上げます。

注

1) この数字は、1996年の党大会における、トニー・ブレアの「教育、教育、そして教育である」という今も悪名高いスピーチから生まれたものである。
2) 本稿の意図した範疇を超えているが、これらのデモに関する社会学と政治学の探究も見られるようになってきている（Ibrahim 2011参照）。
3) Brown（1990）は、こうしたプロセスにおいて、親の影響や特権の重要性を述べるにあたって「ペアレントクラシー」という語を用いてきた。

訳注

訳注1　ブラウン報告の正式名称は「高等教育財務と学生の経済に関する独立検証報告書」という。当報告書によって授業料の値上げと所得連動返済型学資ローン（卒業後に一定の年収を得るようになったらローンの返済が始まるという制度）の導入が提案された。こうした方針は、当時の政権与党が掲げた高等教育の無償化とは正反対の政策であった。そのため、世間から強い反発を浴び、最終的には学生デモと暴動にまで発展することとなった（山崎2010）。

訳注2　イギリスにおける1990年代の高等教育政策の再編を語る上で、欠かすことのできない出来事に継続・高等教育法（1992年）の制定と『デアリング報告書』（1997年）の発表がある。1960年代半ば以降、イギリスの高等教育には大学部門と高等教育機関部門（ポリテクニクなど）の二元構造が存在していた。前者はアカデミック志向が強く、後者は実学志向が強かったとされている。しかし、大学への進学希望者の増加や高等教育機関部門の社会的評価が低いことに対する当該機関からの不満を背景として、両者を統合する議論が進むこととなる。結果的に1992年の継続・高等教育法により、高等教育機関部門が大学へと昇格することとなる。これによってイギリスの高等教育の二元構造が解消され一元化されることとなる。また、『デアリング報告

書』は高等教育の拡充という方針のもとブレア政権下で発表された報告書である。ブレア政権は、国際的な経済競争の時代において、高等教育の拡充によりイギリスの国際的な地位を確立するという意識を持ち、教育政策を政府の最優先事項に位置付ける。そして、高等教育の拡充を目的として、『デアリング報告書』により授業料の導入が提唱されるに至る。これによって、イギリスの大学における授業料無償の時代は終わり、授業料は値上げの一途を辿ることとなる（秦2001; 2014, 山崎2010）。

訳注3　内向き/外向き（inward/outward）とはThiem（2009）の議論を踏まえたものである。Thiem（2009）によれば、教育の地理学は「内向き」の研究と「外向き」の研究に分けられるという。「内向き」の研究は教育そのものを研究の最終目的とするもので、供給や消費、学校教育の成果など空間的多様性を説明すべき現象として扱う。一方で、「外向き」の研究は、これとは対照的に、教育の供給や消費、学校といったものがいかに空間を創出しているか、あるいは地理学的なプロセスを生み出しているかを問題とする。Holloway et.al.（2010）はThiem（2009）の教育の地理学の議論を踏まえて、学生の居住や移動など、学生の経験を中心的に着目して、それらを政治経済と関連付ける研究が必要であることを指摘している。

訳注4　磯田（2000: 46）は、このエスカレータ地域について「このエスカレータはサウスイースト地区に流入した青年に対し、労働市場への入口を提供し、キャリアを進めるなかで社会階層の上昇を可能にし、一定期間後に地区外への移住によってエスカレータから降ろす、という形で機能する。このとき乗降客は世代内社会上方移動の機会が最も豊富なサウスイースト地区でこれを実現することができるのである。」と説明している。

訳注5　ステューデンティフィケーションは特定地域における学生人口の集中的な増加によってもたらされる社会的・文化的・経済的・物理的な都市空間の変容を意味する。世界的な高等教育の拡大に伴う都市空間の変容プロセスを概念化するためにイギリスの地理学者Darren Smithによって提唱された。社会的・文化的・経済的・物理的な都市空間の変容の具体例についてはSmith and Holt（2007）を参照されたい。管見の限り日本で初めてステューデンティフィケーションの語に言及したのは堤・オコナー（2008）であり、その後に中澤（2017）が英語圏でのステューデンティフィケーションに関する研究動向の紹介と日本の都市地理学への示唆を行なっている。また、学会誌『人文地理』における学界展望（2017年1月～12月：都市）においてステューデンティフィケーションの語が紹介された。

訳注6　Smith（2009）によれば、高等教育の拡大によって学生生活は、都市生活の他の領域と同様に商品化（commodification）にうってつけの領域となっている。この点、学生は教育的な登場人物として表象されるのと同様に、マネタライズ・商品化される人物として表象されている。ステューデンティフィケーションは、市場性を帯びながら学生向けの都市サービス部門を生み出し、商品化と同時に進行しているのだという。

訳注7　『現代人文地理学の理論と実践――世界と読み解く地理学的志向――』の用語解説（訳者作成）では、文化資本は「人々に独特なもの、そして優位性と支配性を与える生活様式と消費パターン」（山本・菅野2018: 359）とされている。同様にハビトゥスは「個人が日常生活において蓄積するが、個人に自覚されない知覚、思考、行為を生み出す性向」（山本・菅野2018: 359）とされている。

訳注8　義務教育課程修了後に高等教育機関への進学希望者が勉強する課程のこと。シックス・フォームでは高等教育機関への進学準備の教育が行われる。また、イギリスにおける大学進学に伴う試験については矢野（2012）が詳しい。

訳注9　学生人口の減少によってもたらされる社会的・文化的・経済的・物理的な都市空間の変容（特に衰退）を示す語。Kinton et.al.（2016）が詳しい。

訳注10　マーク・ホールトンは博士号取得後、ポーツマス大学で非常勤講師、ブライトン大学で講師を歴任し、2021年1月現在、プリマス大学で講師を務めている。

訳注11　マーク・ライリーは、2021年1月現在、リバプール大学で準教授を務めている。

参考文献

Allinson, J. (2006). Over-educated, over-exuberant and over here? The impact of students on cities, *Planning, Practice & Research* 21, pp. 79-94.

Andersson, J., Sadgrove, J. and Valentine, G. (2012). Consuming campus: geographies of encounter at a British university. *Social and Cultural Geography* 13(5), pp. 501-515. DOI: 10.1080/14649365.2012.700725.

Archer, L. and Leathwood, C. (2003). Identities, inequalities and higher education. In: Archer, L., Hutchings, M. and Ross, A. (eds) *Higher education and social class, issues of exclusion and inclu-*

sion. London: Routeledge, pp. 175-191.

Baláž, V. and Williams, A. M. (2004). 'Been there, done that': international student migration and human capital transfers from the UK to Slovakia. *Population, Space and Place* 10, pp. 217-237.

Bourdieu, P. (1977). *Outline of a theory of practice*. Chicago: Chicago University Press.

Bourdieu, P. (1986). The forms of capital. In: Richardson, J. (ed.) *Handbook of theory and research for the sociology of education*. New York: Greenwood Press, pp. 241-258.

Bourdieu, P. (2005). Habitus. In: Hillier, J. and Rooksby, E. (eds) *A sense of place (Second Edition)*. Aldershot: Ashgate, pp. 43-49.

Bradford, M. (1990). Education, attainment and the geography of choice. *Geography*, pp. 3-16.

Brooks, R. and Waters, J. (2009a). International higher education and the mobility of UK students. *Journal of Research in International Education* 8, pp. 191-209.

Brooks, R. and Waters, J. (2009b). A second chance at 'Success': UK students and global circuits of higher education. *Sociology* 43, pp. 1085-1102.

Brooks, R. and Waters, J. (2011a). Fees, funding and overseas study: mobile UK students and educational inequalities. *Sociological Research Online* 16, pp. 1-9.

Brooks, R. and Waters, J. L. (2011b). *Student mobilities, migration and the internationalization of higher education*. New York: Palgrave Macmillan.

Brown, G. (2011a). Emotional geographies of young people's aspirations for adult life. *Children's Geographies* 9, pp. 7-22.

Brown, P. (1990). The 'third wave': education and the ideology of parentocracy. *British Journal of Sociology of Education* 11 (1), pp. 65-85.

Brown, R. (2011b). *Higher education and the market*. London: Taylor & Francis.

Butcher, A. P. (2004). Educate, consolidate, immigrate: educational immigration in Auckland, New Zealand. *Asia Pacific Viewpoint* 45, pp. 255-278.

Chatterton, P. (1999). University students and city centres-the formation of exclusive geographies: the case of Bristol, UK. *Geoforum* 30, pp. 117-133.

Chatterton, P. (2010). The student city: an ongoing story of neoliberalism, gentrification, and commodification. *Environment and Planning A* 42, pp. 509-514.

Chatterton, P. and Hollands, R. (2003). *Urban nightscapes: youth cultures, pleasure spaces and corporate power*. London: Routledge.

Christie, H. (2007). Higher education and spatial (im)mobility: non-traditional students and living at home. *Environment and Planning A* 39, pp. 2445.

Christie, H. (2009). Emotional journeys: young people and transitions to university. *British Journal of Sociology of Education*, 30(2), pp. 123-136.

Clayton, J., Crozier, G. and Reay, D. (2009). Home and away: risk, familiarity and the multiple geographies of the higher education experience. *International Studies in Sociology of Education* 18, pp. 157-174.

Collins, D. and Coleman, T. (2008). Social geographies of education: looking within, and beyond, school boundaries. *Geography Compass* 2, pp. 281-299.

Collins, F. L. (2006). Making Asian students, making students Asian: the racialisation of export education in Auckland, New Zealand. *Asia Pacific Viewpoint* 47, pp. 217-234.

Crossley, N. (2001). The phenomenological habitus and its construction. *Theory and Society* 30, pp. 81-120.

Crozier, G., et al. (2008). Different strokes for different folks: diverse students in diverse institutions-experiences of higher education. *Research Papers in Education* 23, pp. 167-177.

Dearden, L. (2010). *Liberal democrats have betrayed students*. The Guardian, Tuesday 16th November 2010.

Department for Education and Skills (DfES). (2006). Prime Minister Launches Strategy to Make UK Leader in International Education. [Online]. Retrieved on 18 April 2006 from: http://www.dfes.gov.uk/pns/Display-PN.cgi?pn_id=2006_0058.

Dibiase, D. (2000). Is distance education a Faustian bargain? *Journal of Geography in Higher Education* 24, pp. 130-135.

Duke-Williams, O. (2009). The geographies of student migration in the UK. *Environment and Planning A* 41, pp.1826-1848.

Fielding, A. J. (1992). Migration and social mobility: South East England as an escalator region. Regional Studies 26, pp. 1-15.

Fincher, R. and Shaw, K. (2009). The unintended segregation of transnational students in central Melbourne. *Environment and Planning A* 41, pp. 1884-1902.

Fincher, R. and Shaw, K. (2011). Enacting separate social worlds: 'International' and 'local' students in public space in central Melbourne. *Geoforum* pp. 42, 539-549.

Findlay, A. M., et al. (2011). World class? An investigation of globalisation, difference and international student mobility. *Transactions of the Institute of British Geographers* 37, pp. 118-131.

Frølich, N. and Stensaker, B. (2010). Student recruitment strategies in higher education: promoting excellence and diversity? *International Journal of Educational Management* 24, pp. 359-370.

Garmendia, M., Coronado, J. M. and Uren ˜a, J. M. (2012). University students sharing flats: when studentification becomes vertical. *Urban Studies* 49 (12), pp. 2651-2668.

Gulson, K. N. (2007). *Spatial theories of education: policy and geography matters*. London: Routledge.

Higgins, J. and Nairn, K. (2006). 'In transition': choice and the children of New Zealand's economic reforms. *British Journal of Sociology of Education* 27 (2), pp. 207-220.

Higher Education Statistics Agency (HESA). (2011a). Headline statistics. [Online]. Retrieved on 4 May 2012 from: http://www.hesa.ac.uk/index.php?option=com_content&task=category&sectionid=1&id=1&Itemid=161.

Higher Education Statistics Agency (HESA). (2011b). *Students in higher education institutions*. Cheltenham: Higher Education Statistics Agency.

Hinton, D. (2011). 'Wales is my home': higher education aspirations and student mobilities in Wales. *Children's Geographies* 9, pp. 23-34.

Holdsworth, C. (2006). 'Don't you think you're missing out, living at home?' Student experiences and residential transitions. *The Sociological Review* 54, pp. 495-519.

Holdsworth, C. (2009a). Between two worlds: local students in higher education and 'scouse'/student identities. *Population, Space and Place* 15, pp. 225-237.

Holdsworth, C. (2009b). 'Going away to uni': mobility, modernity, and independence of English higher education students. *Environment and Planning A* 41, pp. 1849-1864.

Holloway, S. L., Hubbard, P., Jo ¨ns, H. and Pimlott-Wilson, H. (2010). Geographies of education and the significance of children, youth and families. *Progress in Human Geography* 34, pp. 583.

Home Office. (2010). *The Student Immigration System: A Consultation*. London: Home Office.

Hopkins, P. (2011). Towards critical geographies of the university campus: understanding the contested experiences of Muslim students. *Transactions of the Institute of British Geographers* 36, pp. 157-169.

Hubbard, P. (2008). Regulating the social impacts of studentification: a Loughborough case study. *Environment and Planning A* 40, pp. 323-341.

Hubbard, P. (2009). Geographies of studentification and purpose-built student accommodation: leading separate lives? *Environment and Planning A* 41, pp. 1903-1923.

Ibrahim, J. (2011). The new toll on higher education and the UK student revolts of 2010-2011. *Social Movement Studies* 10, pp. 415-421.

Johnston, R., Wilson, D. and Burgess, S. (2007). Ethnic segregation and educational performance at secondary school in Bradford and Leicester. *Environment and Planning A* 39, pp. 609-629.

Kenna, T. (2011). Studentification in Ireland? Analysing the impacts of students and student accommodation on Cork City. *Irish Geography* 44 (2-3), 191-213.

King, R., Findlay, A., Ahrens, J. and Dunne, M. (2011). Reproducing advantage: the perspective of English school leavers on studying abroad. Globalisation, *Societies and Education* 9, pp. 161-181.

Leathwood, C. and O'Connell, P. (2003). Its a struggle: the construction of the new student in higher education. *Journal of Education Policy* 18, pp. 597-615.

Leese, M. (2010). Bridging the gap: supporting student transitions into higher education. *Journal of Further and Higher Education* 34, pp. 239-251.

Lehmann, W. (2009). Becoming middle class: how working-class university students draw and transgress moral class boundaries. *Sociology* 43, pp. 631-647.

Lindberg, M. E. (2009). Student and early career mobility patterns among highly educated people in Germany, Finland, Italy, and the United Kingdom. *Higher Education* 58, pp. 339-358.

Lunt, I. (2008). Beyond tuition fees? The legacy of Blair's government to higher education. *Oxford Review of Education* 34, pp. 741-752.

Mangan, J., Hughes, A., Davies, P. and Slack, K. (2010). Fair access, achievement and geography: explaining the association between social class and students' choice of university. *Studies in Higher Education* 35, pp. 335-350.

Marcucci, P. N. and Johnstone, D. B. (2007). Tuition fee policies in comparative perspective: theoretical and political rationales. *Management* 29, pp. 25-40.

Matthews, D. (2012). Study of HE in FE questions whether students are making 'informed choices'. *The Times Higher Education*, Wednesday 18th July, 2012.

McVeigh, T. (2011). British students are learning that it pays to take their degree abroad. *The Guardian*, Sunday 6th March 2011.

Middleton, C. (2011). *Go west: why British students are heading to America*. The Telegraph, Saturday 18th June, 2011.

Moffat, M. (1991). College life: undergraduate culture and higher education. *Journal of Higher Education* 62, pp. 44- 61.

Morgan, D. and McDowell, L. (1979). *Patterns of residence: costs and options in student housing*. Guildford: The Society for Research into Higher Education.

Mpinganjira, M. (2009). Comparative analysis of factors influencing the decision to study abroad. *African Journal of Business Management* 3, pp. 358-365.

Munro, M., Turok, I. and Livingston, M. (2009). Students in cities: a preliminary analysis of their patterns and effects. *Environment and Planning A* 41, pp. 1805-1825.

National Centre for Education Statistics (NCES). (2011). Digest of Education Statistics. [Online]. Retrieved on 4 May 2012 from: http://www.nces.ed.gov/pubs2011/2011015.pdf.

Nido. (2008). Nido student living. [Online]. Retrieved on 4 May 2012 from: http://www.nidostudentliving.com/home.php.

Patiniotis, J. and Holdsworth, C. (2005). 'Seize That Chance!'leaving home and transitions to higher education. *Journal of Youth Studies* 8, pp. 81-95.

Pratt, J. (1997). *The polytechnic experiment: 1965-1992*. London: Society for Research into Higher Education.

Punch, S. (2002). Youth transitions and interdependent adult-child relations in rural Bolivia. *Journal of Rural Studies* 18, pp. 123-133.

Punch, S. (2004). The impact of primary education on school-to-work transitions for young people in rural Bolivia. *Youth & Society* 36, pp. 163-182.

Read, B., Archer, L. and Leathwood, C. (2003). Challenging cultures? Student conceptions of belonging and isolation at a post-1992 university. *Studies in Higher Education* 28, pp. 261-277.

Reay, D. (2003). A risky business? Mature working-class women students and access to higher education. *Gender and Education* 15, pp. 301-317.

Reay, D. (2004). 'It's all becoming a habitus': beyond the habitual use of habitus in educational research. *British Journal of Sociolo-*

gy of Education 25 (4), pp. 431-444.

Reay, D., Crozier, G. and Clayton, J. (2010). ''Fitting In'' or'' Standing Out'': working-class students in UK higher education. *British Educational Research Journal* 36, pp. 18-26.

Reay, D., Davies, J., David, M. and Ball, S. J. (2001). Choices of degree or degrees of choice? Class, 'race' and the higher education choice process. *Sociology*, 35, pp. 855-874.

Riley, M. (2010). Emplacing the research encounter: exploring farm life histories. *Qualitative Inquiry* 16, pp. 651- 662.

Rugg, J., Rhodes, D. and Jones, A. (2002). Studying a niche market: UK students and the private rented sector. *Housing Studies* 17, pp. 289-303.

Russo, A. P. and Tatjer, L. C. (2007). From citadels of education to cartier latins (and back?): the changing landscapes of student populations in European cities. *Geography Compass* 1, pp. 1160-1189.

Sabri, S. and Ludin, A. N. M. (2009). Studentification: is it a key factor within the residential decision-making process in Kuala Lumpur? http://www.fab.utm.my/download/ConferenceSeminar/SEATUC200904P.pdf

Sage, J., Smith, D. and Hubbard, P. (2011). The rapidity of studentification and population change: there goes the (student) hood. Population, *Space and Place* 18, pp. 597-613.

Savage, M., Bagnall, G. and Longhurst, B. (2005). Globalization and belonging. London: Sage Publications Ltd.

Silver, H. (2004). ''Residence'' and'' Accommodation'' in higher education: abandoning a tradition. Journal of Educational *Administration and History* 36, pp. 123-133.

Smith, D. (2002). Patterns and processes of 'studentification' in Leeds. *The Regional Review* 12, pp. 15-16.

Smith, D. (2005). Studentification': the gentrification factory? In: Atkinson, R. and Bridges, G. (eds) *Gentrification in a global context: the new urban colonialism*. London: Routledge, pp. 72-89.

Smith, D. (2009). Student geographies, urban restructuring, and the expansion of higher education. *Environment and Planning A* 41, pp. 1795-1804.

Smith, D. P. and Holt, L. (2007). Studentification and 'apprentice' gentrifiers within Britain's provincial towns and cities: extending the meaning of gentrification. *Environment and Planning A* 39, pp. 142-161.

Sprigings, N. (2008). Buy-to-let and the wider housing market. *People, Place & Policy Online* 2, pp. 76-87.

Thiem, C. H. (2009). Thinking through education: the geographies of contemporary educational restructuring. *Progress in Human Geography* 33 (2), pp. 154-173.

Tighe, C. and Thompson, J. (2010). *Fresh wave of student protests*. The Financial Times, November 30th 2010.

Walkerdine, V. (2011). Neoliberalism, working-class subjects and higher education. *Contemporary Social Science* 6, pp. 255-271.

Waters, J. (2006). Geographies of cultural capital: education, international migration and family strategies between Hong Kong and Canada. *Transactions of the Institute of British Geographers* 31, pp. 179-192.

Waters, J. and Brooks, R. (2010). Accidental achievers? International higher education, class reproduction and privilege in the experiences of UK students overseas. *British Journal of Sociology of Education* 31, pp. 217-228.

Waters, J. and Brooks, R. (2011). International/transnational spaces of education. Globalisation, *Societies and Education* 9, pp. 155-160.

Waters, J., Brooks, R. and Pimlott-Wilson, H. (2011). Youthful escapes? British students, overseas education and the pursuit of happiness. *Social & Cultural Geography* 12, pp. 455-469.

Wu, W. and Hammond, M. (2011). Challenges of university adjustment in the UK: a study of East Asian Master's degree students. *Journal of Further and Higher Education* 35, pp. 423-438.

訳者参考文献

磯田　弦 2000. ロンドンにおけるバブル景気前後の人口移動変化――動作不順なエスカレータ？. 地理学評論73A: 44-55.

堤　純・オコナーケビン 2008. 留学生の急増からみたメルボルン市の変容. 人文地理4: 45-62.

中澤高志 2017. ステューデンティフィケーションとは何か――論点整理と日本の都市地理学研究への示唆. 都市地理学12: 33-49.

秦由美子 2001.『変わりゆくイギリスの大学』学文社.

秦由美子 2014.『イギリスの大学――対位戦の転位による質的変換』東信堂.

山崎智子 2017. 英国の大学――大学のしくみと大学生. 日本教育学会編『英国の教育』東信堂.

矢野桂司 2012. イギリスの地理学. 地学雑誌121: 586-600.

Holloway, S. L., Hubbard, P., Jons, H. and Pimlott-Wilson, H. 2010. Geographies of education and the significance of children, youth and families. *Progress in Human Geography* 34: 583-600.

Hubbard, P., Kitchin, R., Bartley, B. and Fuller, D. 2002. *Thinking Geographically: Space, Theory and Contemporary Human Geography*. Athlone Press. 山本正三・菅野峰明訳 2018.『現代人文地理学の理論と実践――世界を読み解く地理学的思考』明石書籍.

Kinton, C., Smith, D. P. and Harrison, J. 2016. De-studentification: empty housing and neighborhoods of student populations. *Environment and Planning A*: 1617-1635.

Smith, D. P. and Holt, L. 2007. Studentificatin and 'apprentice' gentrifiers within Britain's provincial towns and cities: extending the meaning of gentrification. *Environment and Planning A*: 142-161.

Smith, D. P. 2009. 'Student geographies', urban restructuring, and the expansion of higher education. *Environment and Planning A*: 1795-1804.

Thiem, C. H. 2009. Thinking through education: the geographies of contemporary educational restructuring. *Progress in Human Geography* 33: 154-173.